

I 調査結果の概要

1 米

(1) 要 旨

平成26年産水陸稲の収穫量は、水稻が843万5,000 t、陸稲が3,630 tとなり、水陸稲合計で843万9,000 tで、前年産に比べ16万8,000 t（2%）減少した。これは水稻の作付面積及び10 a 当たり収量が、それぞれ前年産を2万4,000ha（2%）、3 kg（1%）下回ったためである。

水稻の作柄は、全国平均で作況指数101、10 a 当たり収量は536kgとなった。これは、北海道から関東・東山では、全もみ数が総じて多かったことから作柄がおおむね平年並み以上となった一方、東海以西では、低温・日照不足や一部地域での病虫害等の影響で全もみ数及び登熟が平年を下回ったためである。

陸稲の作柄は、主産地の茨城県及び栃木県において、おおむね天候に恵まれたことから、全国の10 a 当たり収量は257kg、10 a 当たり平均収量対比は107%となった。

平成26年産水稻の被害量は59万4,500 t、被害率は7.1%で、平年に比べて1.9ポイント下回り、前年産に比べては0.4ポイント上回った（表1-1、図1-1）。

図1-1 水稻の作付面積及び収穫量の推移（全国）

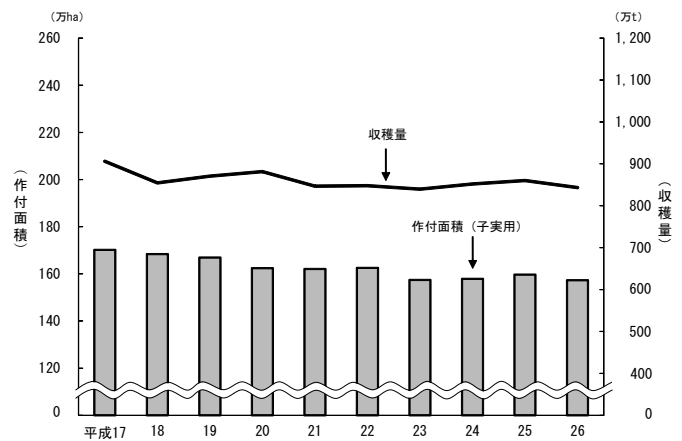


表1-1 平成26年産水陸稲の作付面積、10 a 当たり収量、収穫量及び被害量

全 国 農 業 地 域	作付面積 (子実用) 千ha	10 a 当 た り 収 量 kg	収 穫 量 (子実用) 千t	作 況 指 数 (対平年比)	前 年 産 と の 比 較						参 考	
					作 付 面 積		10 a 当 た り 収 量		収 穫 量		主 食 用 作 付 面 積 千ha	収 穫 量 (主食用) 千t
					対 差	対 比	対 比	対 比	対 差	対 比		
水 陸 稲 計	1,575.0	-	8,439.0	-	△ 24.0	98	nc	△ 168.0	98	
水	1,573.0	536	8,435.0	101	△ 24.0	98	99	△ 168.0	98	1,474.0	7,882.0	
北 海 道	111.0	577	640.5	107	△ 1.0	99	103	11.1	102	103.5	597.2	
東 北	402.5	585	2,354.0	105	△ 3.7	99	102	26.0	101	361.1	2,109.0	
北 陸	212.5	536	1,139.0	100	△ 0.2	100	98	△ 21.0	98	190.0	1,019.0	
関 東・東 山	292.8	544	1,594.0	102	△ 6.1	98	99	△ 41.0	97	279.8	1,524.0	
東 海	99.7	497	495.1	99	△ 2.6	97	97	△ 29.7	94	97.5	483.6	
近 畿	108.0	497	537.1	98	△ 1.4	99	96	△ 30.1	95	104.5	519.9	
中 国	112.6	495	556.9	96	△ 2.6	98	97	△ 30.7	95	108.7	536.6	
四 国	55.3	463	256.2	96	△ 1.1	98	96	△ 16.8	94	54.5	253.0	
九 州	178.2	482	858.8	96	△ 5.3	97	99	△ 36.9	96	173.7	837.3	
沖 縄	0.9	261	2.2	84	0.0	97	97	△ 0.2	94	0.9	2.2	
陸 稲	1.4	257	3.6	107	△ 0.3	82	103	△ 0.7	85	

全 国 農 業 地 域	被 害			害		
	被害面積 千ha	被 害 実 面 積 千ha	被害量 千t	被 害 率		
				本 年	対 平 年 差	対 前 年 差
水 陸 稲 計
水	3,268.0	1,410.0	594.5	7.1	△ 1.9	0.4
北 海 道	171.3	68.6	11.7	2.0	△ 7.9	△ 1.8
東 北	646.8	368.8	106.9	4.8	△ 4.7	△ 1.6
北 陸	375.4	212.5	46.0	4.1	△ 0.7	1.4
関 東・東 山	515.1	220.1	98.5	6.3	△ 1.9	0.7
東 海	257.8	94.1	38.4	7.7	1.2	2.9
近 畿	264.8	99.3	46.6	8.5	1.3	2.6
中 国	249.5	112.7	66.3	11.4	4.0	2.6
四 国	202.9	55.2	38.5	14.4	3.4	3.7
九 州	583.1	178.2	141.1	15.8	3.8	1.2
沖 縄	0.6	0.6	0.7	25.0	16.0	3.3
陸 稲

注：1 陸稲の作況指数欄は、原則として直近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年の平均値（10 a 当たり平均収量）との対比である。
 2 主食用作付面積とは、水稻作付面積（青刈り面積を含む。）から、需給調整の取組として取り扱う米穀等（備蓄米、加工用米、新規需要米等）の作付面積を除いた面積である。
 3 被害面積は被害種類別の面積を合計したもので、2種類以上の被害を受けた場合は重複して計上してある（表1-3において同じ。）。
 4 被害実面積は上記3のうち、重複部分を除いた面積である。
 5 被害率は（被害量÷平年収量）×100である（表1-3及び表1-4において同じ。）。
 6 被害率の対平年差は、昭和54年以降の異常値除外平均被害率との差である（表1-3及び表1-4において同じ。）。

(2) 解説

ア 作付面積（子実用）

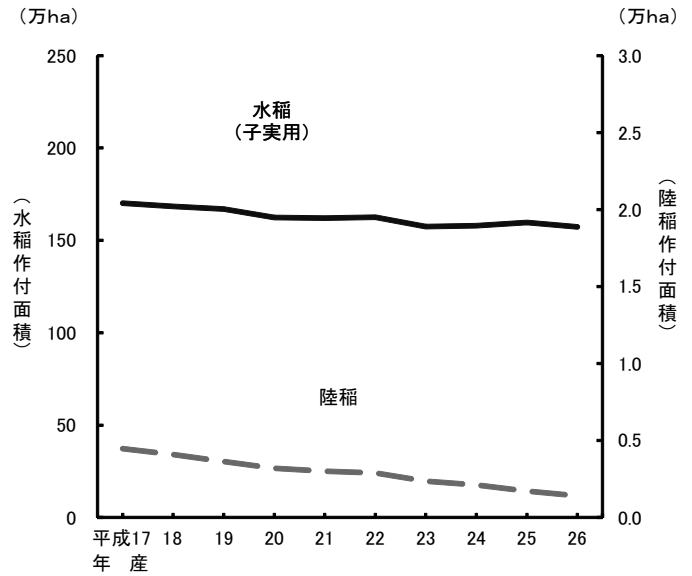
(ア) 水 稲

平成26年産水稲の作付面積（子実用）は157万3,000haで、前年産に比べて2万4,000ha（2%）減少した（表1-1、図1-2）。

図1-2 水陸稲の作付面積の推移（全国）

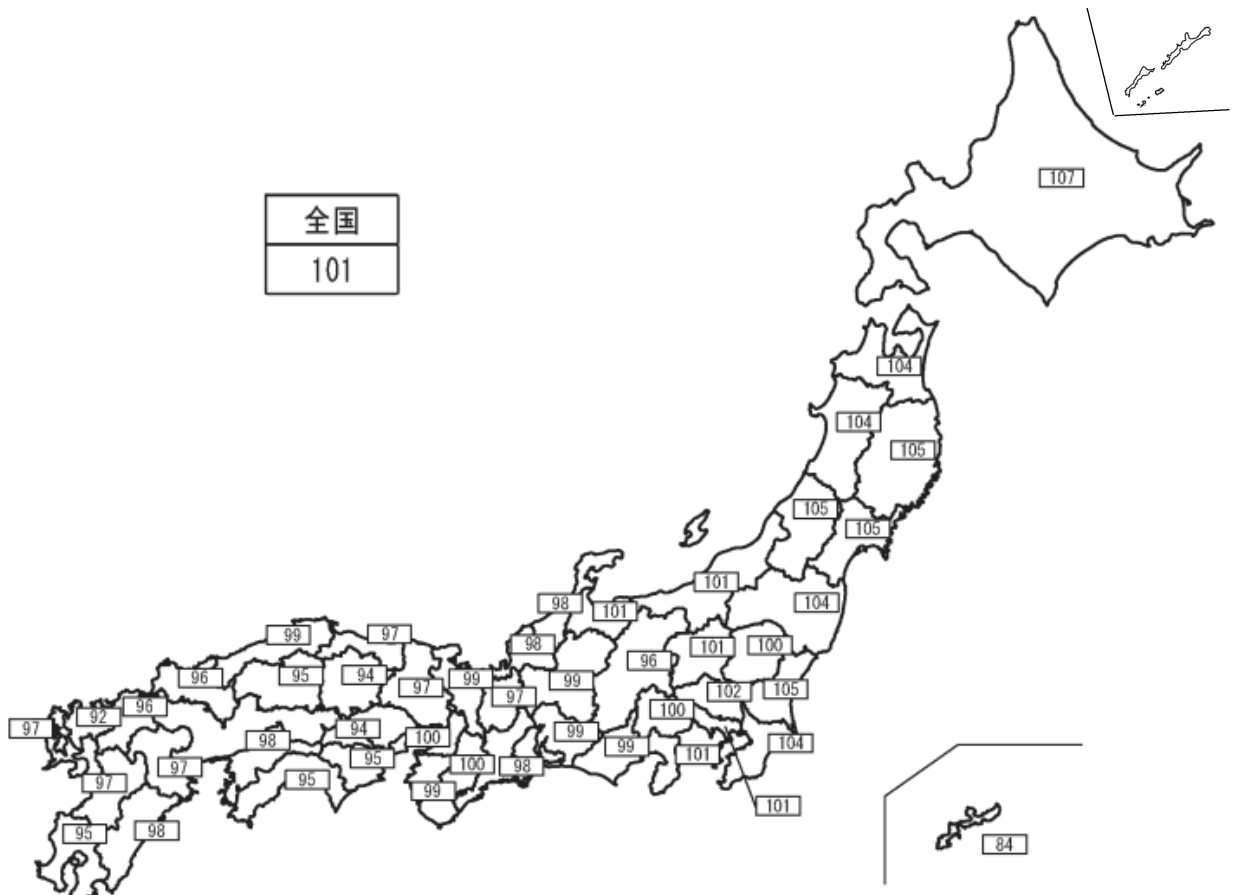
(イ) 陸 稲

平成26年産陸稲の作付面積（子実用）は1,410haで、前年産に比べて310ha（18%）減少した（表1-1、図1-2）。



イ 作柄概況

図1-3 平成26年産水稲の都道府県別作況指数



注：西南暖地の早期栽培等の地域（徳島県、高知県、宮崎県、鹿児島県及び沖縄県）は早期栽培（第一期稲）、普通期栽培（第二期稲）を合算したものである。

平均で585kg（同105）となった（図1-6、1-7）。

図1-6 平成26年産水稻の作柄表示地帯別作況指数（東北）

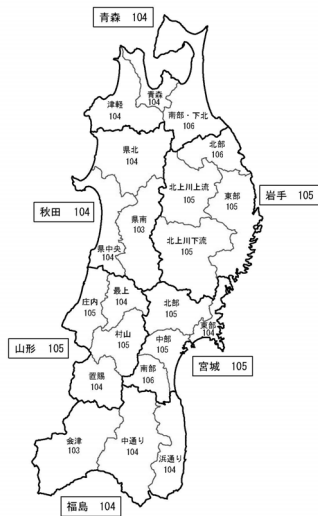
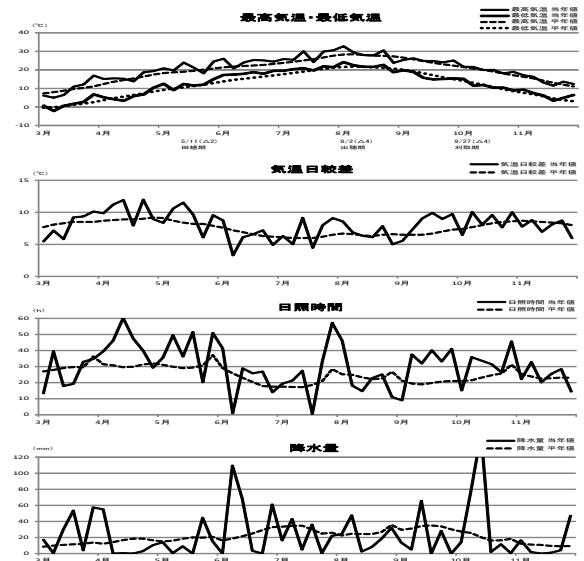


図1-7 平成26年産稲作期間の半旬別気象経過（仙台）



c 北 陸

田植期は各県で平年並みないし2日早くなり、出穂期は7月の気温・日照時間がおおむね平年を上回ったため、各県で2日ないし3日早くなった。

穂数は、石川県で「平年並み」となったほかは、「多い」ないし「やや多い」となった。

1穂当たりもみ数は、新潟県で「やや少ない」となったほか、各県で「平年並み」となった。以上のことから、全もみ数は石川県で「平年並み」となったほかは、各県で「やや多い」となった。

登熟は、出穂期以降、気温・日照時間がおおむね平年を下回って推移したため、各県で平年に比べ「やや不良」となった。

このため、10a当たり収量は、新潟県547kg（作況指数101）、富山県541kg（同101）、石川県508kg（同98）、福井県510kg（同98）となり、北陸平均で536kg（同100）となった（図1-8、1-9）。

図1-8 平成26年産水稻の作柄表示地帯別作況指数（北陸）

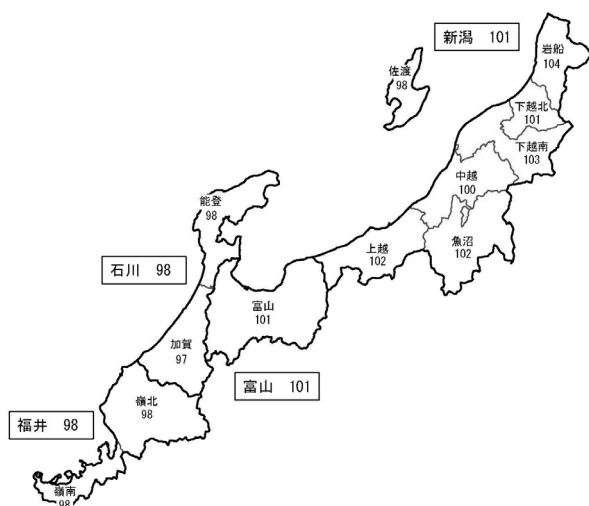
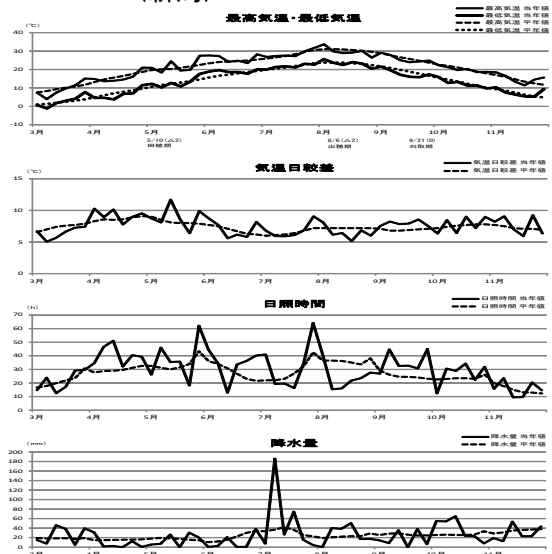


図1-9 平成26年産稲作期間の半旬別気象経過（新潟）



d 関東・東山

田植期は東京都で6日早くなったほかは、各県でおおむね平年並みとなり、出穂期は7月の気温・日照時間がおおむね平年を上回ったため、群馬県及び埼玉県で平年並みだったほかは、各都県で平年に比べ2日から5日早くなった。

穂数は、各都県で平年に比べ「やや多い」ないし「平年並み」となった。

1穂当たりもみ数は、茨城県で平年に比べ「やや多い」となったほかは、各都県で「平年並み」ないし「やや少ない」となった。以上のことから、全もみ数は、茨城県で「多い」となったほかは、各都県で「やや多い」ないし「平年並み」となった。

登熟は、8月中旬から9月上旬にかけて、日照時間が平年をおおむね下回って推移したため、各都県で「平年並み」ないし「やや不良」となった。

このため、10a当たり収量は、茨城県548kg（作況指数105）、栃木県538kg（同100）、群馬県500kg（同101）、埼玉県501kg（同102）、千葉県558kg（同104）、東京都416kg（同101）、神奈川県500kg（同101）、山梨県547kg（同100）、長野県597kg（同96）となり、関東・東山平均で544kg（同102）となった（図1-10、1-11）。

図1-10 平成26年産水稲の作柄表示地帯別作況指数（関東・東山）

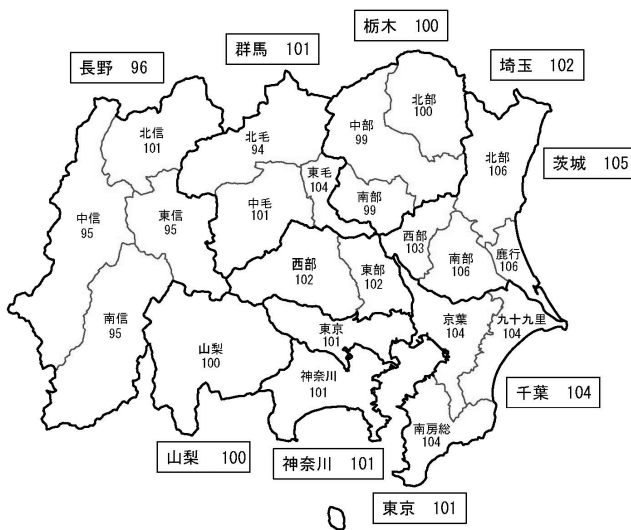
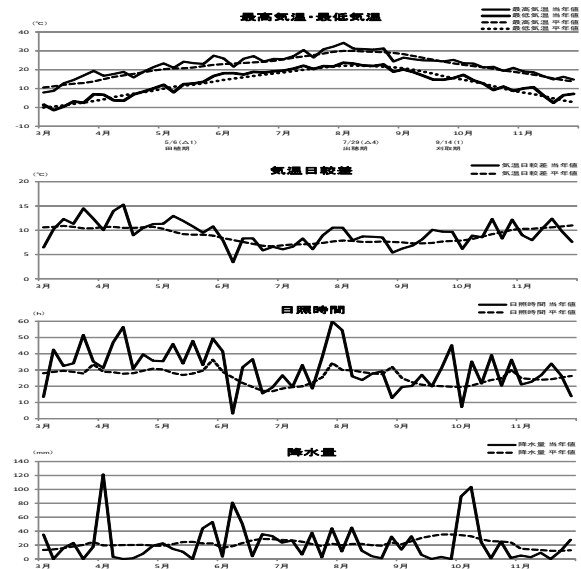


図1-11 平成26年産稲作期間の半月別気象経過（水戸）



e 東海及び近畿

田植期は各府県でおおむね平年並みとなり、出穂期は7月の気温・日照時間がおおむね平年並みに推移したため、静岡県で平年に比べ3日早かったほかは、各府県でおおむね平年並みとなった。

穂数は、各府県で平年に比べ「やや多い」ないし「平年並み」となった。

1穂当たりもみ数は、各府県で平年に比べ「平年並み」ないし「やや少ない」となった。以上のことから、全もみ数は、兵庫県及び奈良県で「やや少ない」となったほかは、「やや多い」ないし「平年並み」となった。

登熟は、奈良県で「やや良」となったほかは、8月から9月上旬にかけて気温・日照時間が平年を下回ったことから、滋賀県で「不良」となり、そのほかの各府県で「平年並み」ないし「やや不良」となった。

このため、10 a 当たり収量は、岐阜県482kg（作況指数99）、静岡県514kg（同99）、愛知県504kg（同99）、三重県491kg（同98）、滋賀県502kg（同97）、京都府507kg（同99）、大阪府495kg（同100）、兵庫県487kg（同97）、奈良県514kg（同100）、和歌山県492kg（同99）となり、東海平均で497kg（同99）、近畿平均で497kg（同98）となった（図1-12、1-13）。

図1-12 平成26年産水稻の作柄表示地帯別作況指数（東海及び近畿）

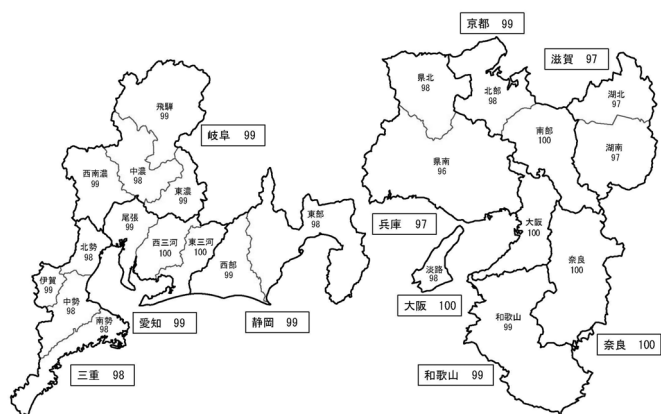
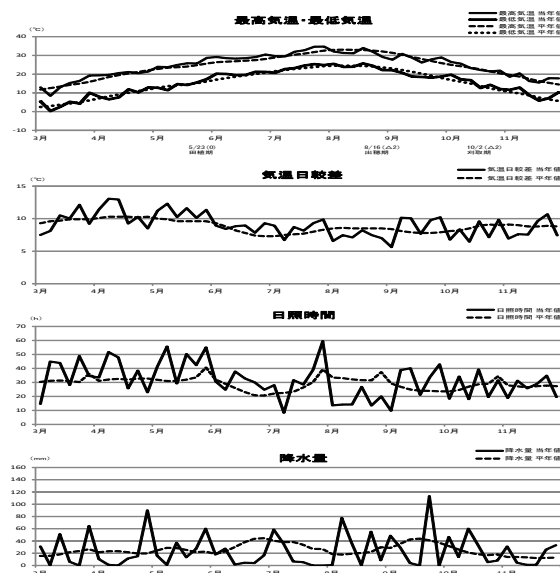


図1-13 平成26年産稲作期間の半旬別気象経過（名古屋）



f 中国及び四国

田植期はおおむね平年並みとなり、出穂期は各県で7月中旬以降の気温・日照時間が平年を上回って推移したため、おおむね平年並みとなった。

穂数は、香川県で「やや少ない」となったほかは、各県で田植え期以降おおむね天候に恵まれたため「やや多い」ないし「平年並み」となった。

1穂当たりもみ数は、島根県で「やや良」、岡山県及び愛媛県で「平年並み」となったほか、各県で「やや不良」ないし「不良」となった。以上のことから、全もみ数は鳥取県で「やや良」、島根県で「良」、岡山県、広島県、徳島県（早期栽培）及び愛媛県で「平年並み」となったほかは、各県で「やや不良」ないし「不良」となった。

登熟は、高知県（早期栽培）で「やや良」、山口県及び香川県で「平年並み」となったほかは、各県で登熟期間の低温や日照不足の影響等で「やや不良」ないし「不良」となった。

このため、10 a 当たり収量は、鳥取県498kg（作況指数97）、島根県503kg（同99）、岡山県493kg（同94）、広島県497kg（同95）、山口県483kg（同96）、徳島県452kg（同95）、香川県468kg（同94）、愛媛県490kg（同98）、高知県438kg（同95）となり、中国平均で495kg（同96）、四国平均で463kg（同96）となった（図1-14、1-15）。

図 1-14 平成26年産水稻の作柄表示地帯別作況指数（中国及び四国）

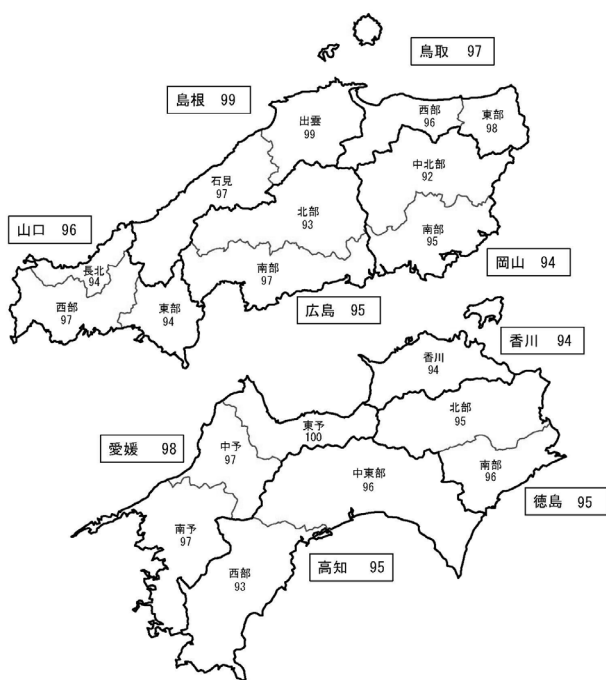
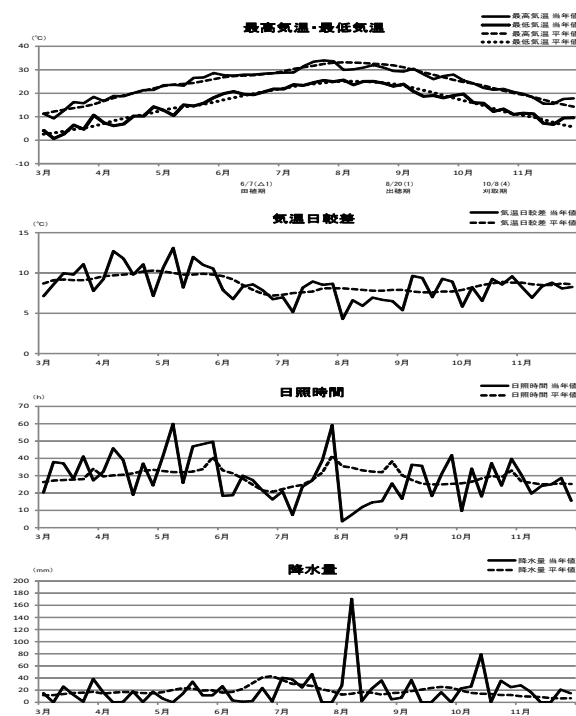


図 1-15 平成26年産稲作期間の半月別気象経過指数（岡山）



g 九州及び沖縄

九州においては、田植期は平年並みとなり、出穂期は各県で平年並みないし2日から5日遅くなった。

穂数は、宮崎県（早期栽培）で「平年並み」となったほかは、各県で「やや少ない」ないし「少ない」となった。

1穂当たりもみ数は、宮崎県（普通期栽培）で「やや多い」、鹿児島県（早期栽培）で「多い」となったほかは、各県で「平年並み」ないし「やや少ない」となった。以上のことから、全もみ数は大分県、宮崎県（早期栽培）及び鹿児島県（早期栽培）で「平年並み」となったほかは、各県で「やや少ない」ないし「少ない」となった。

登熟は、大分県で「やや不良」となったほかは、登熟期間がおおむね天候に恵まれたため、各県で「やや良」ないし「平年並み」となった。

このため、10 a 当たり収量は、福岡県478kg（作況指数96）、佐賀県480kg（同92）、長崎県463kg（同97）、熊本県500kg（同97）、大分県489kg（同97）、宮崎県486kg（同98）、鹿児島県461kg（同95）となり、九州平均で482kg（同96）となった。

沖縄県は、第一期稲の作柄が、台風第8号の影響等により作況指数88となったことに加えて、第二期稲で台風第19号の影響等により作況指数69となったことから、県計の10 a 当たり収量は261kg（同84）となった（図 1-16、1-17）。

図 1-16 平成26年産水稻の作柄表示地帯別作況 指数（九州及び沖縄）

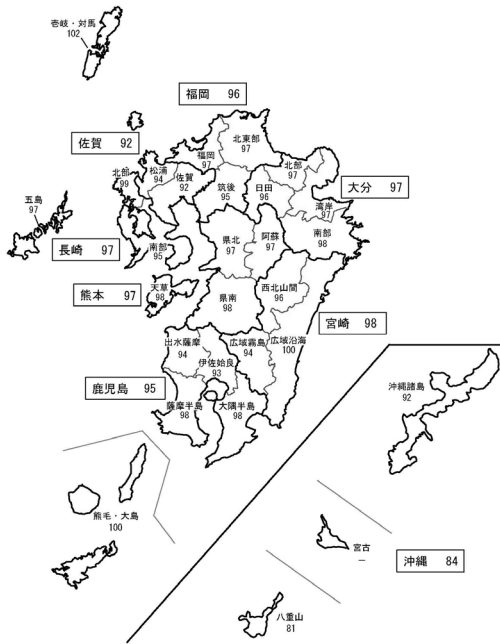
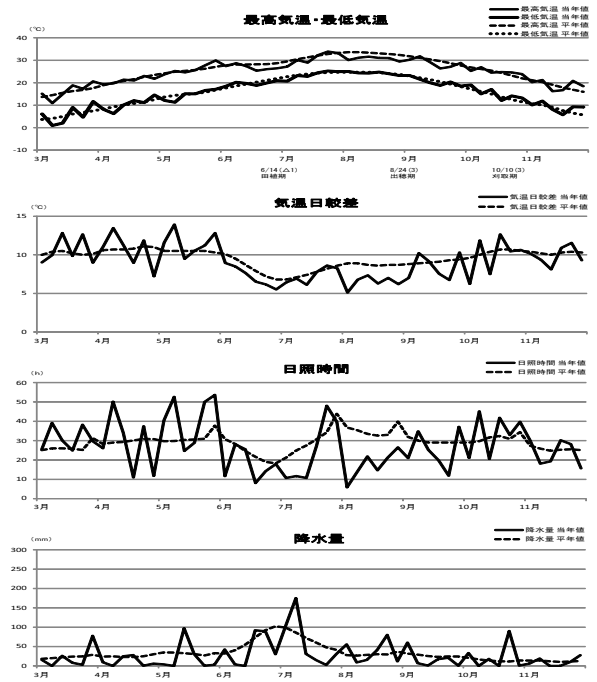


図 1-17 平成26年産稲作期間の半旬別気象経過 指数（熊本）



(イ) 陸 稲（主産地域）

主産地の茨城県及び栃木県において、おおむね天候に恵まれたことから、10a 当たり平均収量対比は茨城県が109%、栃木県が105%であった（表 1-2）。

表 1-2 平成26年産陸稲の作付面積、10a 当たり収量及び収穫量

区 分	作付面積	10a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						
				作 付 面 積		10a 当 たり 収 量		収 穫 量		(参 考) 10a 当 たり 平均収量対比
				対 差	対 比	対 比	対 比	対 差	対 比	
全 国	千ha 1.4	kg 257	千 t 3.6	千ha △ 0.3	% 82	% 103	千 t △ 0.7	% 85	% 107	
う ち 茨 城	1.0	267	2.6	△ 0.2	80	107	△ 0.4	86	109	
栃 木	0.4	249	0.9	0.0	89	91	△ 0.2	81	105	

注：「(参考) 10a 当たり平均収量対比」とは、10a 当たり平均収量（原則として直近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年の平均値）に対する当年産の10a 当たり収量の比率である。

ウ 水稻の被害の概要

全国の被害量は59万4,500 t、被害率は7.1%で、平年に比べて1.9ポイント下回った。

被害種類別にみると、気象被害の被害率は4.1%で、平年を1.6ポイント下回った。このうち、風水害の被害率は0.9%で平年を0.9ポイント下回り、冷害の被害率は0.1%で平年を1.9ポイント下回った。

病害の被害率は2.1%で、平年を0.4ポイント下回った。このうち、いもち病の被害率は1.2%で平年を0.3ポイント下回り、紋枯病の被害率は0.5%で平年を0.1ポイント下回った。

虫害の被害率は0.7%で、平年並みとなった。このうち、ニカメイチュウの被害率は0.1%で平年並み、ウンカの被害率は0.3%で平年並みとなった（表1-3、1-4、図1-18）。

表1-3 平成26年産水稻の被害

被害種類	被害面積	被害量	被害率		
			本年	対平年差	対前年差
	ha	t	%	ポイント	ポイント
総数	3,268,000	594,500	7.1	△ 1.9	0.4
気象被害	1,737,000	342,200	4.1	△ 1.6	0.6
風水害	348,800	75,800	0.9	△ 0.9	△ 0.3
干害	3,740	1,380	0.0	△ 0.1	△ 0.1
冷害	50,700	11,300	0.1	△ 1.9	△ 0.1
日照不足	1,217,000	239,500	2.9	nc	1.8
高温障害	77,300	5,800	0.1	nc	△ 0.5
その他	39,200	8,390	0.1	nc	△ 0.2
病害	910,100	172,600	2.1	△ 0.4	0.3
いもち病	383,300	102,600	1.2	△ 0.3	0.3
紋枯病	258,400	40,100	0.5	△ 0.1	0.0
その他	268,400	29,900	0.4	0.0	△ 0.1
虫害	508,600	55,400	0.7	0.0	△ 0.4
ニカメイチュウ	60,800	5,940	0.1	0.0	0.0
ウンカ	96,800	23,900	0.3	0.0	△ 0.3
カメムシ	104,700	10,400	0.1	nc	0.0
その他	246,300	15,200	0.2	nc	0.0

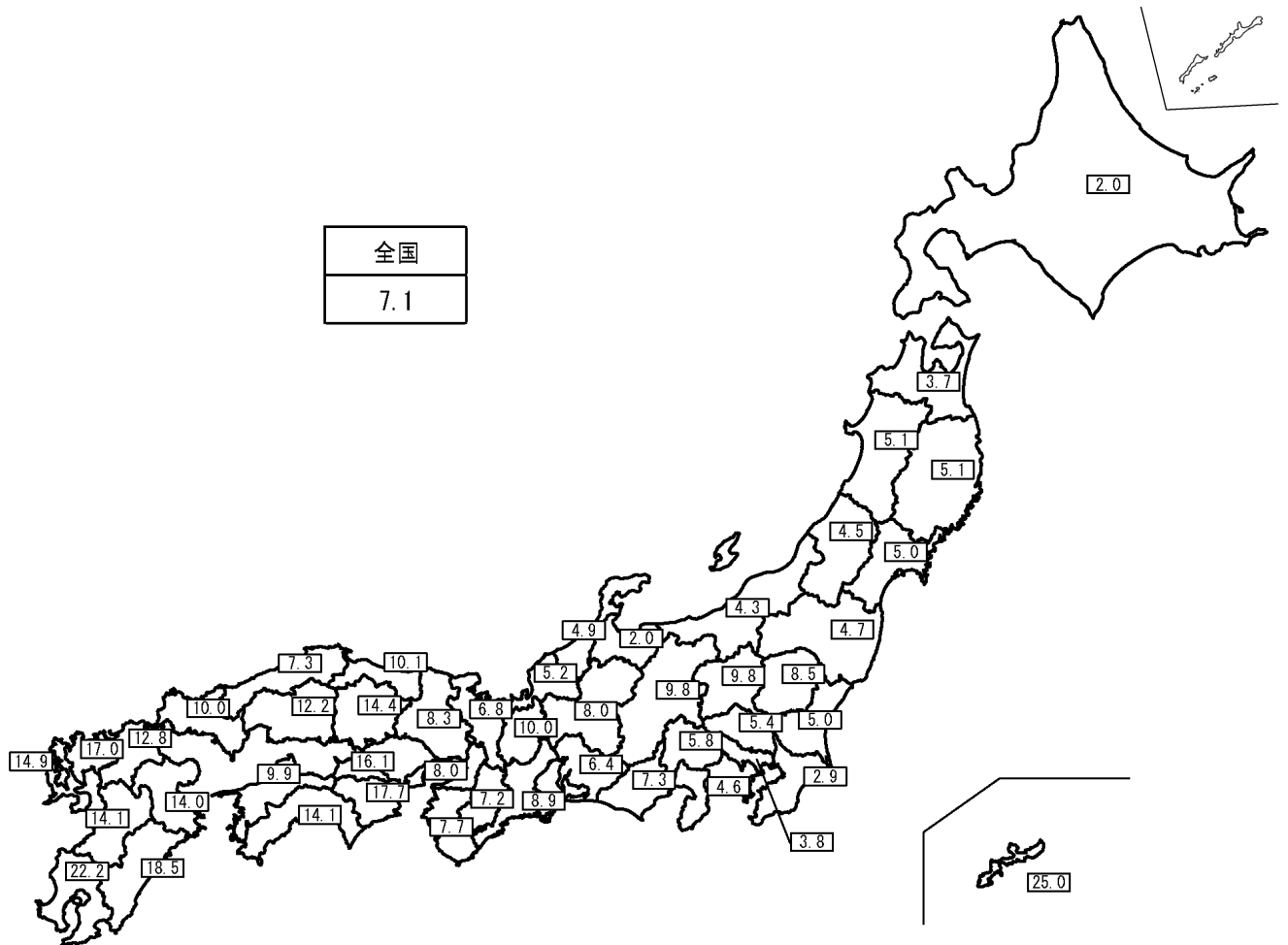
注：気象被害のうち「日照不足」、「高温障害」及び「その他」並びに虫害のうち「カメムシ」及び「その他」については、平成14年産から気象被害及び虫害について表章区分の見直しを行ったことから、平年差の比較をしていない（表1-4において同じ。）。

表 1-4 平成26年産水稻の被害種類別被害率及び対平年差（全国農業地域別）

全国農業地域・区分	総数	気象被害				病害			虫害					
		風水害	冷害	日照不足	高温障害	いもち病	紋枯病	コメイチュウ	ウンカ	カメムシ				
全国	被害率 (%)	7.1	4.1	0.9	0.1	2.9	0.1	2.1	1.2	0.5	0.7	0.1	0.3	0.1
	対平年差	△ 1.9	△ 1.6	△ 0.9	△ 1.9	nc	nc	△ 0.4	△ 0.3	△ 0.1	0.0	0.0	0.0	nc
北海道	被害率 (%)	2.0	1.4	0.2	0.8	0.3	0.0	0.5	0.0	0.0	0.1	-	0.0	0.0
	対平年差	△ 7.9	△ 7.4	△ 0.4	△ 6.3	nc	nc	△ 0.4	△ 0.2	0.0	△ 0.1	0.0	△ 0.1	nc
東北	被害率 (%)	4.8	2.9	0.4	0.0	2.4	0.0	1.6	1.3	0.2	0.2	0.0	0.0	0.1
	対平年差	△ 4.7	△ 4.4	△ 0.8	△ 3.4	nc	nc	△ 0.4	△ 0.3	△ 0.1	0.0	0.0	0.0	nc
北陸	被害率 (%)	4.1	3.3	1.2	-	2.1	-	0.5	0.2	0.3	0.2	0.0	0.0	0.0
	対平年差	△ 0.7	△ 0.2	△ 0.5	△ 0.3	nc	nc	△ 0.5	△ 0.4	0.0	△ 0.1	△ 0.1	△ 0.1	nc
関東・東山	被害率 (%)	6.3	3.5	0.6	0.4	1.7	0.3	2.0	0.8	0.6	0.6	0.2	0.1	0.2
	対平年差	△ 1.9	△ 1.0	△ 1.3	△ 0.6	nc	nc	△ 1.0	△ 0.7	△ 0.4	0.0	0.1	△ 0.1	nc
東海	被害率 (%)	7.7	4.0	1.3	0.1	2.4	0.1	2.3	1.2	0.6	0.8	0.2	0.1	0.3
	対平年差	1.2	1.4	0.0	△ 0.1	nc	nc	△ 0.5	△ 0.4	0.0	△ 0.2	0.0	△ 0.2	nc
近畿	被害率 (%)	8.5	4.3	1.2	-	3.1	-	2.7	1.6	0.9	0.9	0.2	0.4	0.1
	対平年差	1.3	1.9	△ 0.2	0.0	nc	nc	△ 0.5	△ 0.3	0.1	△ 0.4	0.0	△ 0.3	nc
中国	被害率 (%)	11.4	6.7	0.6	0.0	6.1	-	3.2	2.2	0.6	0.8	0.1	0.3	0.2
	対平年差	4.0	3.0	△ 1.2	△ 0.1	nc	nc	0.8	0.9	0.0	△ 0.3	0.0	△ 0.3	nc
四国	被害率 (%)	14.4	8.3	3.7	-	4.3	0.0	4.1	1.9	1.3	1.3	0.1	0.4	0.3
	対平年差	3.4	3.6	0.6	0.0	nc	nc	△ 0.2	△ 0.2	△ 0.1	△ 0.4	△ 0.1	△ 0.5	nc
九州	被害率 (%)	15.8	8.1	1.7	-	6.4	0.0	4.7	3.0	0.9	2.5	-	1.8	0.2
	対平年差	3.8	2.0	△ 1.1	△ 0.3	nc	nc	0.9	1.3	△ 0.2	0.7	0.0	0.9	nc
沖縄	被害率 (%)	25.0	14.8	7.7	-	-	-	2.9	2.9	-	1.7	-	-	-
	対平年差	16.0	7.3	2.1	-	nc	nc	2.2	2.2	-	1.0	0.0	△ 0.2	nc

図 1-18 平成26年産水稻の都道府県別被害率（総数）

単位：%



注： 西南暖地の早期栽培等の地域（徳島県、高知県、宮崎県、鹿児島県及び沖縄県）は早期栽培（第一期稲）、普通期栽培（第二期稲）を合算したものである。